

大相撲五月場所観戦感想の記

今場所は、序盤・中盤・終盤に分けて、それぞれのピリオドで感じたことをメモしてみた。

序盤（5日目まで）の印象は、ひとことでは、**「あつという間に主要力士たちがボロボロと脱落」**と言う表現しかない。

初日、横綱照ノ富士は大栄翔に完敗し、足腰の不安定さを公表したような結果になった。正代の連敗にはもう驚きもしなかったが、御嶽海と貴景勝も引退直前のような相撲で黒星を並べる状態。

五日目を終ったら、横綱・大関・関脇・小結の中に全勝力士はいなくなってしまうばかりか、1勝しかかできない大関もいる。先頭を走るのは前頭10枚目以下の二力士だけという、どうしようもない始まりになった。

37才の玉鷲と35才の佐田の海の動きが良いのが目立ち、ことによると玉鷲の2回目の優勝もありかと思ったりもしたのだが……。

五日目	横綱	大関	関脇	小結	平幕
全勝					碧山 一山本
1敗	照ノ富士			大栄翔	玉鷲 翔猿 若元春 佐田の海 妙義龍 輝
2敗		貴景勝	阿炎	豊昇龍	琴ノ若 隆の勝 宇良 琴恵光
3敗		御嶽海	若隆景		霧馬山 遠藤 阿武咲 他多数

中日になるとそれはさらに進み、横綱・大関・関脇・小結は黒星が三つ以上の力士ばかりとなってしまった。おまけに、平幕では星のつぶし合いになり、全勝も1敗もいなくなった。

先頭を走るのは平幕の2敗力士5人となったが、碧山と一山本の相撲は千秋楽まで続くとは考えにくいので、玉鷲・隆の勝・佐田の海の顔が脳裡を彷徨い始めた。このまま荒れ放題に荒れた結果、優勝力士の成績が10勝5敗というようなことにならないだろうか、心配になってきた。

中日	横綱	大関	関脇	小結	平幕
全勝					
1敗					
2敗					玉鷲 隆の勝 碧山 佐田の海 一山本
3敗	照ノ富士	貴景勝	阿炎	大栄翔 豊昇龍	霧馬山 翔猿 宇良 若元春 琴勝峰 千代大龍

中盤の5日間を過ぎて10日目になると様相が変わってきた。

2敗力士、3敗力士の中から脱落が始まり、2敗2名と3敗5名に絞られてきた。また、中日では3敗に並んでいた横綱以外の役力士は消え去ってしまった。照ノ富士が中日以降は持ち直して3敗に留まっていたことが注目すべき点かもしれない。そして、玉鷲の「もしかして……」も消えてしまった。大関を破った力士はインタビュールームでNHKのインタビューを受ける慣わしになっているが、今場所大関に勝ったところで何か意味があるのだろうか、インタビューを受ける力士も心なしか白々しい。

十日目	横綱	大関	関脇	小結	平幕
全勝					
1敗					
2敗					隆の勝 一山本
3敗	照ノ富士				霧馬山 宇良 碧山 佐田の海

11 日目からは、星のつぶし合いの中を生きてきた経験がものを言うのだろうか。元関脇の隆の勝が浮き上がってきたのと、前半に3敗を喫した照ノ富士が踏みとどまりじわじわと追い上げている景色になってきた。相手を正面に置いて（弱点である横から攻められぬように）、前進圧力を欠かさないようにするという「好調時の相撲の型」を思い出したようだ。

巧みな取り口で静かにマイペースの相撲を取る霧馬山と、35 才ながら素早く巧さのある相撲の佐田の海も目が離せなくなってきた。

		横綱	大関	関脇	小結	平幕
11 日目	2 敗					隆の勝
	3 敗	照ノ富士				霧馬山 宇良 佐田の海 一山本

12 日目、隆の勝は一山本との直接対決を退け、霧馬山は若元春との技巧派對決に敗れた。隆の勝は単独トップを守り、宇良も貴景勝を破り「もしかして宇良も・・・」という空気も漂い始めた。照ノ富士がもう1敗すれば・・・という期待の声も聞こえてくるようになってきたが、危ない場面もありながらも勝ち続ける無気味な存在になってきた。

		横綱	大関	関脇	小結	平幕
12 日目	2 敗					隆の勝
	3 敗	照ノ富士				宇良 佐田の海

13 日目になって、さらに大きな動きがあった。

先頭を走っていた隆の勝が、後半になって復調してきた若隆景の鋭い動きに翻弄されて3敗になり、照ノ富士・佐田の山と三人が並ぶ結果となった。隆の勝の動きはどことなくぎこちなく、昨日までの相撲とは一変して、明らかに緊張しているようであった。

ここまで来れば優勝ラインは「12 勝 3 敗」に留まりそうで、ほっと一安心というところ。

		横綱	大関	関脇	小結	平幕
13 日目	2 敗					
	3 敗	照ノ富士				隆の勝 佐田の海

14 日目、大栄翔の猛烈な突きの後の引き技に屈した佐田の海が脱落したが、隆の勝は速さと力強さで好調の霧馬山を土俵に這わせて勝ち残った。いよいよ照ノ富士と隆の勝に絞られて千秋楽を向かえることになった。理論上は4敗の力士にも優勝の可能性はあるとは思いますが、そこまで混戦状態になることは多分ないだろうと思う。

		横綱	大関	関脇	小結	平幕
14 日目	2 敗					
	3 敗	照ノ富士				隆の勝
	4 敗				大栄翔	佐田の海

そして千秋楽、隆の勝は佐田の海の土俵際の柔らかな腰の使い方に敗れて11 勝 4 敗となり、照ノ富士は御嶽海を制して、「横綱が優勝」というメンツを保つことができた。

しかし冷静に見れば、優勝がかかる千秋楽の結びの一番「照ノ富士対御嶽海」は、失策だった。怪我を負っていてまともに相撲が取れる状況にない大関を対戦相手にしても、戦う前から勝敗はわかっていた。興行の面白さを真剣に考えるなら、照ノ富士の対戦相手は佐田の海とする方が正しかったように思う。

「混乱なく横綱が優勝して終る」ことを配慮した審判部の作為的な判断だったのではないかという不信

感が残る取組編成だった。

殊勲賞は大栄翔と隆の勝、敢闘賞は佐田の海、技能賞は該当なしという結果になったが、私感を交えて少々コメントしてみたい。

今場所をつまらなくしたのは、御嶽海・貴景勝・正代の三大関だと言える。横綱の月給は300万円、大関は250万円と言われている。地位の保全策などの優遇策がとられているこの二つの階級については、「固定給」に「貢献度（出勤率または勝敗差）」を加えた給与体系に変えるべきではないか。

「大関になれば身の安全が確保出来る」という安心感に守られているのでは、健全でないように感じる。今場所を千秋楽まで面白くし続けたのは隆の勝・佐田の海と思う人が多い。

優勝争いに加わった何人かの力士への評価もさることながら、白星数・黒星数に関係なく土俵上での活躍に絞って眺め直して見ると、霧馬山・琴ノ若・玉鷲・若元春・宇良・翔猿を揚げておきたい。新しい力が、場所毎に少しずつ進化しているのが目に見えてきて、頼もしさを感じる。

三賞は、こうした力士たちへの動機付けの効果があることも意識しておかなければならない。

そんなことも横に置きながら場所を振り返って見ると、私版「今場所の三賞」はこんな感じになった。

殊勲賞＝隆の勝　技能賞＝霧馬山または若元春　敢闘賞＝佐田の海

NHKの実況中継を見ていると、今場所も相変わらず一場所好成績をあげた力士を「やれ三役だ、やれ大関取りだ」と相変わらず囃し立てていた。報道陣ばかりか相撲協会の幹部までが先走って騒ぎ立てて、その力士の静かなる成長を阻害して駄目にしてしまうことが多いこの頃。

静かに見守りながら真に頭角を現すのを待つ寛容さも、人材育成の観点から見て大事なことだと思っている。

以上

千秋楽の結びの一番が終わってまもなく、日本相撲協会のwebのトップページの画像は若隆景から照ノ富士に置き換わっていた。

